

会 議 錄

会議の名称	令和7年度 第3回 日向市図書館複合施設整備アドバイザリー会議
開催日時	令和7年11月28日（金曜日）16:00～17:50
開催場所	日向市役所2階災害対策本部室
出席者	<p><アドバイザー></p> <ul style="list-style-type: none"> ・桑野斉 国立大学法人宮崎大学 地域資源創成学部 教授 ・青山鉄兵 学校法人文教大学学園 人間科学部 准教授 ・中川敬文 株式会社イツノマ 代表取締役 <p><事務局></p> <ul style="list-style-type: none"> ・総合政策部 濱田 ・総合政策課 麻田、押川、一木、野村 ・市立図書館 海野、貴田 <p><オブザーバー></p> <ul style="list-style-type: none"> ・アカデミック・リソース・ガイド株式会社
議題	<ol style="list-style-type: none"> 1 出席者紹介 2 これまでの経緯 <ul style="list-style-type: none"> ➢ アドバイザリー会議 ➢ 議会報告 ➢ 市民参画（日向ラボ・ラボ、語る会） 3 策定作業の進捗状況 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 図書館・生涯学習チーム ➢ 子育て支援チーム ➢ 複合施設チーム ➢ 事業手法チーム 4 議事 <ul style="list-style-type: none"> (1) ビジョン・コンセプトについて (2) 子ども・若者の居場所について 5 今後のスケジュール
会議資料の名称及び内容	・資料 第2回日向市図書館複合施設アドバイザリー会議説明資料
記録方法	<input type="checkbox"/> 全文記録 <input type="checkbox"/> 発言者の発言内容ごとの要点記録 <input checked="" type="checkbox"/> 会議内容の要点記録
会議内容	

開会

1. 出席者紹介

2. これまでの経緯

事務局より、資料に基づき説明。

3. 議事

(1) ビジョン・コンセプトについて

(桑野) 今回の資料で示しているビジョンについては施設全体の大きなコンセプトとし、図書館機能はそれとは別に策定する予定か

(事務局) 現時点では機能別のコンセプトは作らず、施設全体のコンセプトとしてまとめていきたいと考えている。

(桑野) 図書館複合施設の整備を進めるにあたって、KPIとしてはわかりやすいのは蔵書数やスペースになるかと思うが、今後、こういった評価については市民の生活がどう良くなっているか、主観的に評価されていくと考えている。そうなる場合、コンセプトにも関係してくるが、市民の人がどう感じてほしいのか、といったことを具体的に決めていく予定はあるか。

(事務局) これまでの日向ラボ・ラボでも様々な意見をいただいているが、市民にとって蔵書数や貸出冊数というよりもどれだけくつろぐことのできるスペースがあるのかといったことが気になると感じている。そうなった場合は、KPIとしては貸出冊数ではなく滞在時間が正解になるのではないかと思われる。

(桑野) 施設ができることで、市民一人ひとりに具体的にどのようにしていくのか、年齢ごとに分けて成果のイメージのようなものがあるともっとわかりやすくなるではないかと感じる。

(中川) 新たな言葉でビジョン・コンセプトを決めるよりも、基本理念を軸に考えたほうが良いと思う。例えば、基本理念の「学びの種をまき」が具体的にどういうことが起こるのか、実際の活動やアクションプランを出していく段階だと感じている。多くの施設がビジョンをネーミングで表すものになると思うが、提案のあったビジョンでは設計に反映するのが難しいと感じる。むしろ、ビジョンとコンセプトはかえって作らないほうが良いのではないか。民間ではそういったものは設定しないので、今後の具体的なアクションを考えるためにも、基本理念を深掘りするための日向ラボ・ラボの運営いう位置づけかと思う。基本理念に沿った具体的な姿をたくさん出していく方が良いと思う。

(桑野) 私としては理念、ビジョン、コンセプトの設定については議会や市民に説明するために行政にとっては必要なプロセスだと思っている。

(青山) 提案のあった「好きが見つかる」は視点が個人化したなという印象を受ける。誰に伝えるかによって使い分けが必要だが、目指す姿とズレが生じるのではないかと感じる。

また、図書館という言葉を使うかというかについても重要なと思う。図書館複合施設に公民館機能をどう組み込んでいくかを考えたときに、公民館が目指している「学びつつ地域をつくる」という部分を組み合わせていくことを考えると新しい複合施設は「図書館」と呼ばない方が施設の魅力が増すのではないかと感じる。

(中川) 図書館という名前だと若者は行きづらさを感じると思うので、意味づけとしては図書館ではなくメディアセンターやまちづくりセンターとして表現した方がよいと思う。

(桑野) 例えば今の議論でいうと、図書館として名乗らないが運用は図書館法に基づくものか、あるいは図書館法にもとづかない施設で運営していくという考え方のどちらなのか。

(青山) 図書館機能自体は図書館法に基づいて運用したほうが良いと思う。

(中川) 文字ではなく映像でビジョンを示してはどうだろうか。市として何に勝負するのかわかりやすく示してほしい。それでどういった視点でアドバイスをすればいいか変わってくる。

(青山) 新しい図書館複合施設を言語化する場合、新しい公民館も機能も言語化する必要があると考える。図書館をリニューアルすると同時に公民館もリニューアルした方が良いと思う。

(桑野) どういった名称としていくのは別の議論として、変更することについては今回が良い機会ではないかと思われる。

(2) 子ども・若者の居場所について

事務局より、資料に基づき説明。

(中川) 居場所については人によって変わってくると思う。「居場所に行く」ではなく「いつのまにか居場所だった」というものなので、どういった順番で取り組むかで変わるかと思う。居場所づくりに実際に携わっている人の意見をもっと聞くべきかと思う。現在の日向ラボ・ラボのように誰でも参加できるハードルの低い取組が重要で、適度なインプットと刺激を行う取組が必要かと思う。

(青山) 子どもの居場所づくりを行う人について、ユースワーカーという呼び方や施設をユースセンターという呼び方をすることが日本でも多くなってきている。居場所づくりのヒントを得るためにユースセンターに視察するのも良いと思う。

ユースセンターでは、学校とは違う場所で何かが生まれていくような仕掛けやデザインがあり、そこに上手く関わるユースワーカーといった要素があることで、施設の機能だけでなくそれを運用していく人材が居場所づくりには重要だと思う。そういう場合にも、「教育」という視点ではなく、いわゆる支援臭がしないようにすることは重要。

(中川) 都農町のイツノマのオフィスでは、中学生が駄菓子屋を経営している。やる日もあるがやらない日もある。また、高鍋高校では月に1回、高鍋駅で何かをやる、というルールを決めて取り組んでいるが、新しい施設でも3つや4つ程度、その気があれば何かを作れたり、人を呼べたりするような仕組みがあると良いと思う。若者の居場所づくりの事例としてはVIVISTOPが面白い取組をしているため視察に行ってみるのも良いと思う。新しい複合施設にすることで、「1か月に1回はこういった体験ができる」といったような雰囲気を持てるといいと思う。

(青山) 新しい複合施設のターゲットとする「若者」の年齢をどのように設定するかも大事かと思うがどうか。

(事務局) 市としては若者として18歳未満をターゲットにすることになるかと思う。

(青山) 全国にあるユースセンターのターゲットも中高生に限るものや0歳から30歳に限るものなど様々。これまでの国の政策として、抜けている年代であるのでターゲットとして狙う年代としては良いと思う。例えば海外では、20代前半の若者が仕事終わりに施設に来て、お酒を飲みながらビリヤードするといったシーンも見受けられる。

(事務局) 子ども・若者の居場所づくりについては議論がまだ深まっていない状況であるため、今後、視察や市民のニーズを取り入れながら考えていきたい。

(中川) 高校生にとって魅力的なのは、「自分たちが言ったことが叶うこと」だと思う。高校生たちが自分たちでやるような場があると良いと思う。

4. 今後のスケジュール

事務局より、資料に基づき説明。

閉会